

京都市中臣遺跡の受口状口縁土器

中居和志

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都市中臣遺跡の受口状口縁土器

中居和志

1. はじめに

中臣遺跡は、京都市山科区に所在する旧石器時代から中世に及ぶ複合遺跡である。中でも、弥生時代後期を中心とする時期は、山科盆地を代表する大規模な集落であったことが知られている。^(注1)

当該期中臣遺跡は、近江地域との関係の深さが強調されてきており、「近江からの移住の地」で「他地域への近江色伝播のセンター的役割」を果たしたとの指摘もある。^(注2)近江地域との関係の深さを示すとされてきているのが受口状口縁土器である。受口状口縁土器は、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての近江地域を代表する土器として認識されている。そのため、受口状口縁土器の存在によって、近江地域との直接的な関りを示すものとして扱われがちである。^(注3)

本論では、まず隣接する近江地域南半における受口状口縁土器の様相を示し、中臣遺跡の受口状口縁土器の変遷との比較を行い、受口状口縁土器の動向について検討したい。

2. 近江地域における受口状口縁土器

受口状口縁土器には、壺、甕、鉢、手焙形土器の各器種(以下、それぞれ受口壺・甕・鉢)がある。^(注4)近江地域南半の受口状口縁土器の変遷を図2・3に示した。^(注5)弥生時代中期後葉末には、受口壺・甕がある。受口壺は、大型の体部をもつものが多い。一方で細頸壺の口縁部が受口壺と近似しており、小型の受口壺として扱われた可能性がある。受口甕は、口縁部外面に波状文等の多様な加飾を施す。

I期は、弥生時代後期前半に相当し、I-1期が後期前葉、I-2期が後期中葉にあたる。I-1期は、受口壺・甕の形態や加飾の統一性が高まる。受口甕には一定程度無文の甕を含む。受口鉢は、扁平な小型の煮沸具として用いる器種だが、当期の扁平度は高くない。脚部をもつ台付鉢が目立つのも当期の特徴である。なお、I-1a期は弥生時代後期の初頭にあたるが、近江地域内では現時点で野洲市八夫遺跡SD9301例しかなく、広域の土器様相として扱うことが難しい。I-1b期の守山市服部遺跡SD201例と同様の一群は近江全域

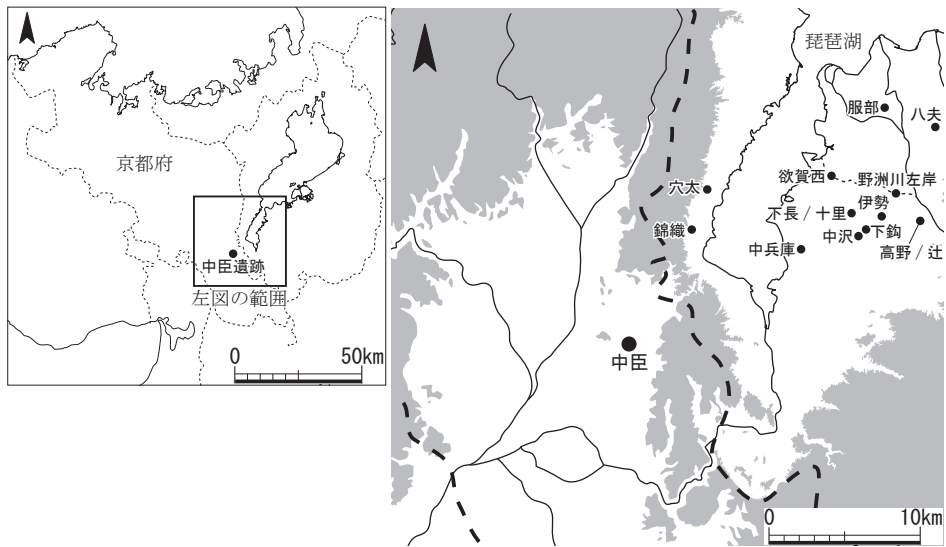


図1 本論関連主要遺跡(広域図1/300万、詳細図1/50万)

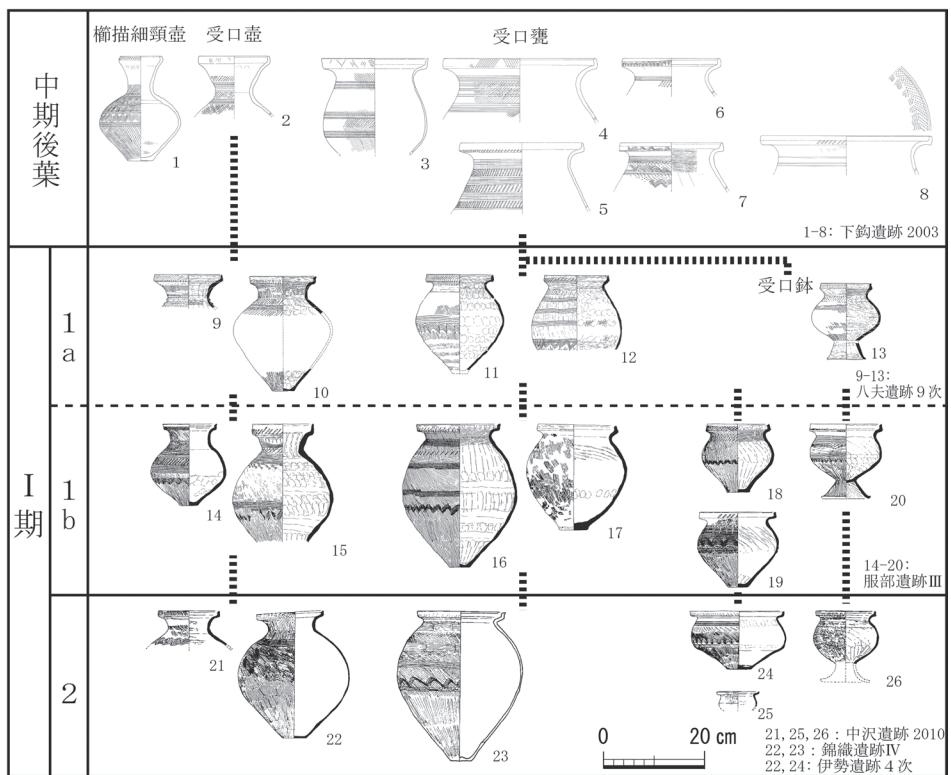


図2 近江地域南半の受口状口縁土器の変遷1 (1/15)

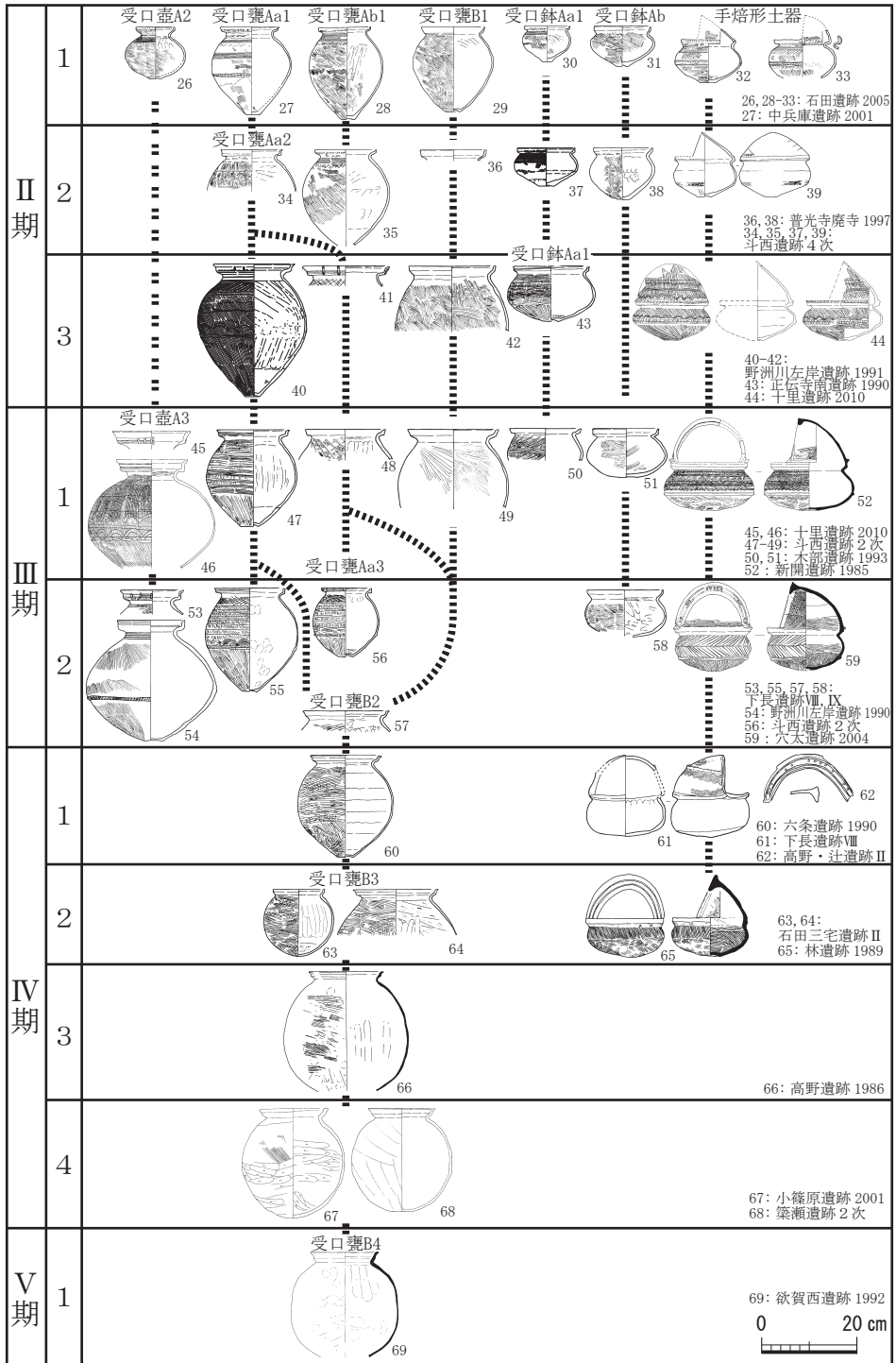


図3 近江地域南半の受口状口縁土器の変遷 2 (1/15)

で確認できることから、八夫遺跡例が近江地域内で先行して器種の置き換えが進んだ資料といえる。^(注6) I-2期は前段階の土器様相を引き継いでおり、受口壺が減少し受口鉢が扁平化していく。受口壺はI-1期よりも頸部が短い。受口甕は形状・加飾方法とも統一性がさらに高まる。一方で台付受口鉢は数を減らしていく傾向にある。

II期は、弥生時代後期後半から庄内併行期古段階古相に相当する。近江地域の独自性が強い時期である。II-1期に出現する手焙形土器は、近江地域と河内地域を分布の中心として九州地域から北関東地域まで広域に分布する。^(注7) 出現期の覆部は無文だが、徐々に加飾が増えていく傾向にある。筆者は、近江地域が発祥地で、香炉としての用途を想定している。^(注8) 受口壺はII-1期の中で一旦激減する。受口甕・鉢の加飾工具は、II-2期まではクシ状工具であるが、II-3期にはヘラ状工具に変遷していく。

III期は、庄内併行期古段階新相から新段階に相当する。東海地域などの土器を受容し、土器様相が多様化する段階である。III-1期には、加飾壺の様相も取り入れた新たな受口壺が出現する。甕と鉢の施文は完全にヘラ状工具やハケ工具に転換する。手焙形土器は、覆部端部が垂下し面を持つ。III-2期には、小型で加飾性に富んだ受口甕Aa3(いわゆる「斗西タイプ」)^(注9)が成立し、広域に広がる。また粗いナナメハケ調整を施す無文の受口甕B2が出現する一方で、受口鉢は当期をもって消滅していく。手焙形土器は、覆部端部の拡張がさらに進み、覆部端部や外面に突帯や浮文を施すなど、加飾化が頂点を迎える。

IV期は、布留併行期古段階から新段階古相に相当する。畿内地域との共通性が高まり、近江地域独自の土器が減少していく段階である。受口壺は消滅し、受口甕と手焙形土器が残る。IV-1期は、無文の受口甕Bのみとなる。手焙形土器は、覆部端部の拡張がさらに進む一方で、加飾の簡略化が進む傾向にある。IV-2期は、受口甕の底部が丸底化し、内面ケズリ調整を施すなど、布留形甕と製作技法の共通性が高まる。手焙形土器は、覆部端部の拡張が最大となる一方で、覆部や体部外面の加飾がなくなる。そして当期で手焙形土器は消滅していく。IV-3期以降は受口甕のみが残るが、甕全体における受口甕の比率も低下傾向にある。IV-4期には、受口甕のハケ調整の範囲が減少しつつ長胴化が進む。

V期は、布留併行期新段階新相に相当する。近江地域の独自器種がほぼ消滅し、古墳時代中期につながる新出土器が確認できる段階である。受口状口縁土器は、甕のみが残存しており、内外面ケズリ調整のB4類へと変遷する。この形態を受口甕の最終段階であるが、湖南地域を中心にその後も須恵器と併存していく。

3. 中臣遺跡の受口状口縁土器

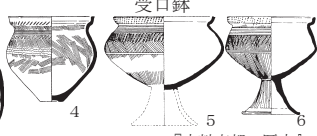
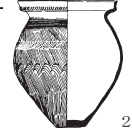
中臣遺跡出土の受口状口縁土器のうち、既報告の資料は限定的である。そのため、既報

後期前葉



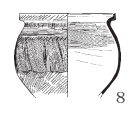
1:52次1号住居

後期中葉



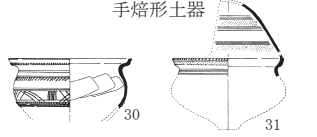
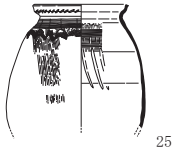
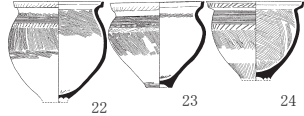
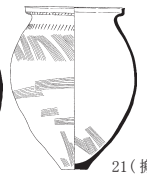
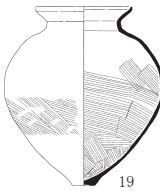
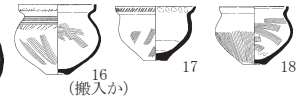
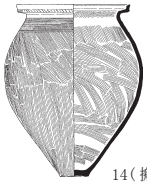
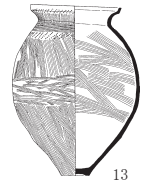
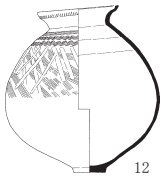
2:『史料京都の歴史』
3:35次1号住居
4:10次E22区2号住居
5,6:35次3号住居

後期後葉 1



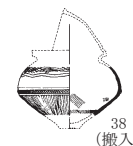
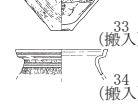
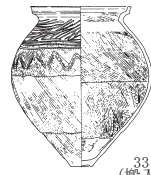
7-9,11:85次堅穴14床面
10:56次3号住居

後期後葉 2



12-18:10次D18区3号住居
19-24:10次E16区1号住居
25-27:92次堅穴1
28:2020土坑1
29:46次1号住居
30,31:35次1号住居埋土

庄内併行期



32,34,35,38:56次12号住居
33:67次8号住居
36,37:85次堅穴14床面



図4 中臣遺跡の受口状口縁土器(1/12)

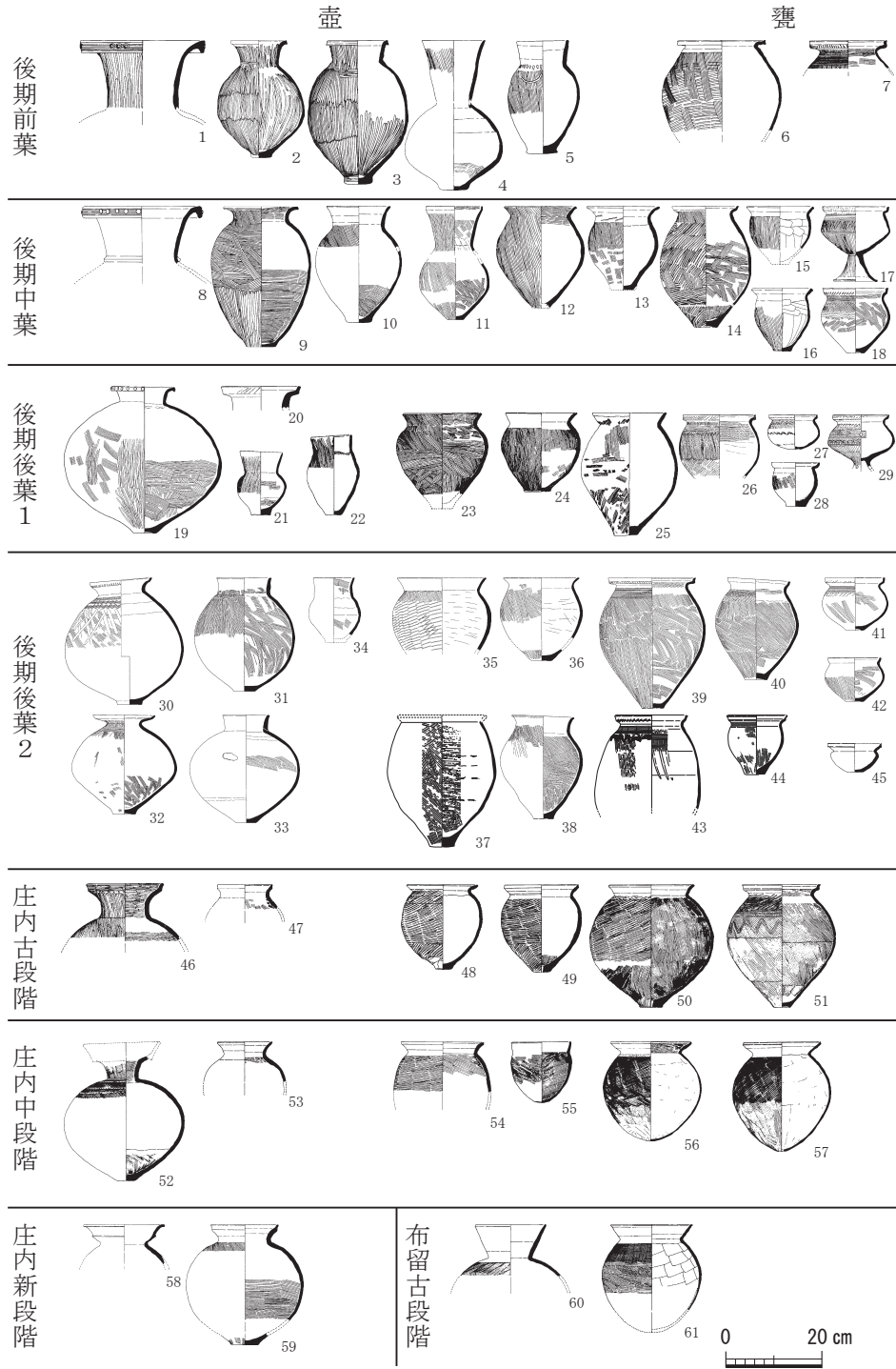


図5 中臣遺跡の土器変遷1 (1/15)

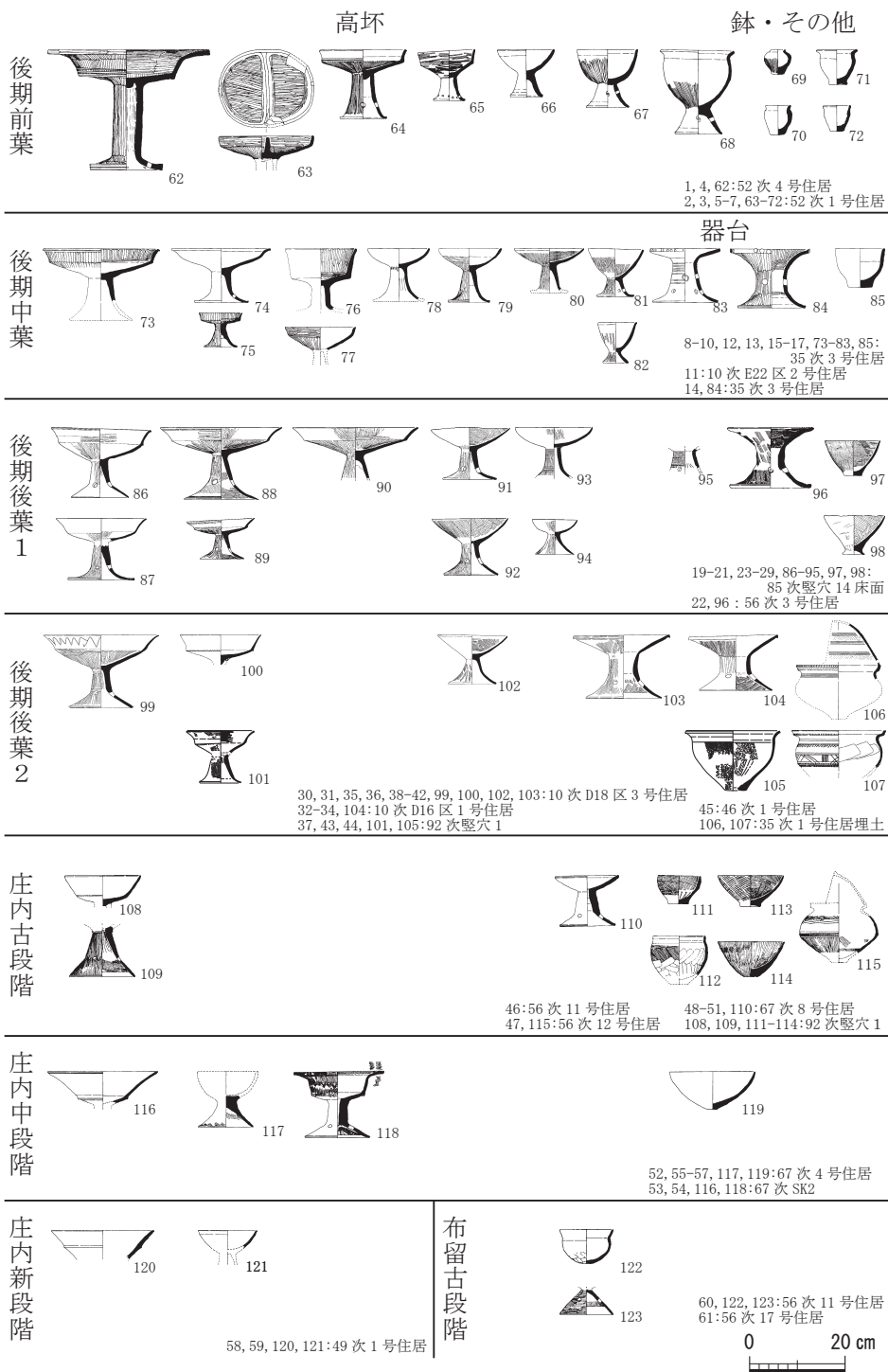


図6 中臣遺跡の土器変遷2 (1/15)

告資料の範囲内で、受口状口縁土器の時期別の変遷を辿っていききたい(図4)。

後期前葉の受口甕は近江地域と極めて共通性が高く、図上では搬入品との区別がつかない。なお未報告資料の中にも受口状口縁土器が多く含まれているという。^(注10)

後期中葉には受口甕・鉢が確認できる。いずれも使用痕があり、日常的な煮沸具であったことがわかる。受口甕は、口縁部の形態や加飾方法など、近江地域南半との共通性がありつつ、全体の形状などに相違点があり、在地製作が多い。なお、No.2は口縁部の立ち上がりの高さからみて前葉に遡る可能性がある。

後期後葉は、土器様相から新旧2段階に分けることができ、受口壺・甕・鉢・手焙形土器が揃う。後期後葉1段階では、受口壺の頸部が高めで、受口甕の口縁外面の列点文は密である。受口甕は体部下半にタタキ調整が残るもの(No.8)があるが、近江地域にもタタキ調整を施す受口甕があり、当遺跡や山城地域に限った特徴ではない。^(注11) 台付受口鉢(No.11)は近江湖南地域からの搬入品であるが、湖南地域では基本的に後期中葉でほぼ消滅する器種である。なお、当期には手焙形土器が出現しており、写真が報告されている。^(注12)

後期後葉2段階では、多くの受口状口縁土器が量的に確認できる。受口壺は、広口壺と形状や加飾の共通性が高い。近江地域では受口壺が一時的に消滅するのと対照的である。受口甕は、最大径が中位にあり、最大径に対して器高が高い。加飾は基本的に直線文・列点文の2段構成である。近江地域南半では、最大径がやや上位で底部が薄い上げ底状となり、3段以上の多段構成の加飾が多い。近江地域の受口状口縁土器と差異が広がりつつあることが分かる。受口鉢は、扁平な形状と甕に近い形状が混じる(No.27)。No.29は内外面ミガキ調整の精製品で、底部を潰して丸底化するなど、やや特殊な個体である。体部に突帯を付す個体(No.28・30)は、加飾の多さからみて手焙形土器の可能性はある。

庄内併行期には受口状口縁土器の総量が減少するが、山城地域全体の傾向との指摘もある。^(注13) 受口壺は無文の個体があるのみで、受口甕は近江湖東・湖南地域からの搬入品(No.33・34)が目立つが、在地製の受口甕(No.35-37)は無文である。^(注14) 手焙形土器(No.38)は近江湖南地域からの搬入品だが、全体形状が不明である。^(注15) そして、庄内併行期以降の受口状口縁土器は確認できておらず、基本的に消滅していく。

4. 中臣遺跡の土器変遷と近江地域

中臣遺跡出土土器の時期ごとの変遷を図5・6に示した。^(注16) 近江地域との差異をみると、東海地域のいわゆるパレス壺と共通する広口壺が少なく、タタキ調整やハケ調整のくの字甕が比較的多い傾向にある。高杯・器台では、庄内併行期の近江地域で主流の深い杯部をもつ高杯や、受部の端部を垂下させる器台が少ない。既報告資料の範囲内であることを前

提としても、近江地域と全く同じ様相とは言いがたいことがわかる。

また、弥生時代後期前葉から布留併行期古段階まで間断がなく資料があることは、集落として継続していることを反映している。近江地域で同様に継続する集落は基本的に見当たらず、中臣遺跡と近江地域で集落が同様の動向を示すとも言い難い。^(注17)

受口状口縁土器の形態からみると、後期前葉の共通性が高いと言えるが、中葉以降は独自に変遷していることが読み取れる。同様の傾向は、受口状口縁土器の出土数が多い伊勢地域にも見て取れる。^(注18) こうした状況は、近江地域の影響力が最も強いのが後期前葉で、その後影響力が低下していく、と解釈しがちである。一方で近江地域内でも、後期前葉は近江地域全体で土器様相の共通性が高いことをすでに指摘している。^(注19) 特に受口状口縁土器から見た場合、後期中葉には近江地域の南北に様相が分かれ、その後東西南北の4つの地域差が生じていくことが指摘されている。つまり、受口状口縁土器は、近江地域の内外を問わず後期前葉に共通性が高く、その後各地に定着しつつ独自に変遷していく土器群である、という評価が適切と考える。こうした動向は、畿内地域で通有のタキ調整く字甕や後期の有稜高杯と比べうる広域の現象であり、「近江系」として近江地域に限定した土器群として扱うことは避けるべきであることがわかる。^(注20)

5. おわりに

本論では受口状口縁土器の変遷を中心に中臣遺跡出土土器について検討を行った。今回は現象面の指摘にとどまっており、今後は土器の変化や共通化が反映する社会像についても検討を進めていく必要がある。また、あくまで既報告資料の範囲内での検討であるため、今後未報告資料の資料化が進むことで新たな事実も判明していくであろう。今後の資料化の進展に期待するとともに、本論がその一助となれば幸いである。

中臣遺跡の資料調査に際しては、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の皆さまに大変お世話になりました。末筆ではありますが感謝を申し上げます。

(なかい・かずし＝京都府教育庁指導部文化財保護課主査)

注1 家原圭太2014「京都市所在中臣遺跡の性格と変遷」『郵政考古』第60号 大阪・郵政考古学会 pp.1-23

注2 國下多美樹1986「近江型甕についての一試論」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会編 pp.425-438、國下多美樹1989「近江系土器について」『京都府弥生土器集成』(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター pp.84-128

注3 中居和志2016「近江系土器と受口状口縁土器」『古墳出現期土器研究』第4号 古墳出現期土器研究会 pp.73-80

- 注4 本来は「壺形土器」等の表記とすべきだが、煩雑さを避けるため「壺」等に省略する。
- 注5 変遷は筆者による以下の編年より抜粋し再編集した。紙幅の都合上出典は省略する。中居和志2010「古墳出現前後の近江地域－土器編年を中心に－」『立命館大学考古学論集』V 立命館大学考古学論集刊行会 pp.125-148、深澤芳樹ほか2022「近畿地方南部地域における弥生時代中期から後期への移行過程の検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第231集 国立歴史民俗博物館 pp.71-209、中居和志2025「近江地域における弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年」『日本考古学協会新潟大会資料集』日本考古学協会新潟大会実行委員会 pp. -
- 注6 筆者による注5（深澤芳樹ほか2022）の山城地域の検討でも、同様に後期前葉初期に位置づけ可能な資料は少ない傾向にある。中臣遺跡の未報告資料中には、後期前葉初期の資料が確認できるが、基本的に近江地域と同様の傾向であると考える。
- 注7 高橋一夫1998『手焙形土器の研究』六一書房
- 注8 中居和志2021「近江地域の手焙形土器」『滋賀県立大学考古学論集』I 滋賀県立大学考古学研究室 pp.41-50
- 注9 近藤 広2001「弥生後期における受口状口縁土器の様相」『西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と地理』西田弘先生米寿記念論集刊行会 pp.91-100
- 注10 桐井理輝氏のご教示による。現在京都市によって遺物の再整理が進められている。
- 注11 近藤 広2011「タタキ調整をもつ受口状口縁系土器-近江の事例-」『淡海文化論叢』第三輯淡海文化財論叢刊行会2011 pp.24-29
- 注12 京都市1983『史料京都の歴史』pp.242。受口鉢口縁端部に覆部を付す手焙形土器である。鉢部はクシ状工具で加飾し、覆部外面に加飾のない初期の手焙形土器である。
- 注13 吹田直子2006「山城地域」（『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター pp.67-85
- 注14 No.36・37は85次堅穴14埋土出土資料であり、庄内併行期を通じて堅穴建物跡の凹地に堆積したものである。そのため、厳密には両資料の時期に幅がある可能性がある。
- 注15 本資料は山城地域最古の手焙形土器としての評価（前掲注7参照）もあるが、相伴土器とヘラ状工具による加飾からみて、当期に位置づけるのが妥当である。
- 注16 既存の編年研究として、以下を参考にした。森岡秀人1990「山城地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社 pp.193-319、國下多美樹1995「山城地域における古式土師器の様相」『庄内式土器研究』Ⅸ 庄内式土器研究会 pp.79-92、高野陽子2003「弥生時代後期～古墳時代の土器様相」『佐山遺跡』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター pp.97-135、前掲注13。なお、紙幅の都合上各土器の出典は省略する。
- 注17 守山市伊勢遺跡の存続期間がやや近い。伊勢遺跡では、後期中葉（I-2期）に大型掘立柱建物群が存在するなど、異なる点も多い。中居和志2022「近江地域における集落変遷と建物構成」『弥生後期社会の実像』古代学研究会 pp.75-90
- 注18 国立歴史民俗博物館山下優介氏が進める共同研究でも、ある程度一致する見解である。
- 注19 前掲注5 中居2010 pp.129
- 注20 前掲注9及び近藤 広1992「土器様相からみた湖南的要素と湖東的要素-辻・高野遺跡出土資料の検討を中心に-」『滋賀考古』第7号 滋賀考古学研究会 pp.29-40